

くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-61 岐阜県羽島郡川島町 Phone: 058689-2101 Fax: 058689-2197

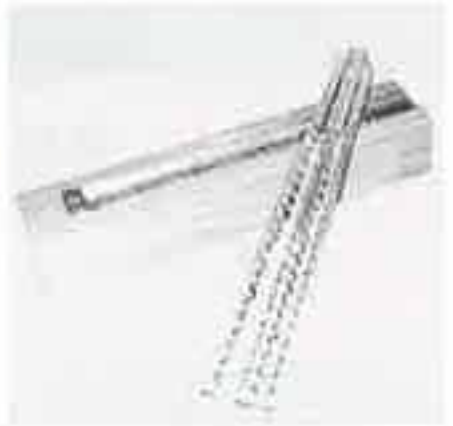


企画展

1997年5月3日～10月12日

むかしの製薬道具

江戸時代は280年にわたって戦乱のない時代が続いたため、様々な職人文化が開花しました。生産の場においても、木や金属を加工する技術が発達し、道具は改良され、



生産効率が上がりました。また、学問の分野でも植物を研究する「本草学」が盛んとなりました。薬の分野では、この2つの流れが売薬の発展をうながしました。つまり、「本草学」は中国の書物に記された産物が日本ではどんな動植物にあたるかを明らかにし、従来輸入されていた生薬の国内生産を可能にしました。そしてそれらの生薬を原料にし、「製造道具」を使用して従来より大量に薬が生産され、流通するようになりました。

このような売薬は、効能はもとより形や服用の方法にもいろいろ工夫がこらされました。中でも、丸薬と煎じ薬は、古くからある薬の形ですが、特に丸薬は携帯にも便利な形で、ながらく親しまれてきました。現在では、薬の形として主流ではありませんが、錠剤に比べてゆっくりと溶けるため、その特長を生かせる薬には、今も丸薬が用いられています。

一方、持ち運びなどは不便ですが、煎じ薬も家庭で簡単にできるため、よく利用されてきました。一時はほかの形の薬におされていたが、近年、漢方薬や民間薬が見直されるにつれ、煎じ薬という形態もまた注目されるようになりました。

このような丸薬と煎じ薬を作るために用いられた製薬道具を紹介いたします。すり減ったものもあれば、傷のついたものもありますが、その様子からどのように薬が作りだされてきたか思い巡らせていただければ幸いです。

丸薬と煎じ薬 どんな道具で作ったのでしょうか？

丸薬は、生薬〔一薬用の動植物に加工をほどこしたもの〕の粉ともち米の粉を混ぜて水などでこね、それを飲みやすいように小さな球状にしたものです。

これを作るにはまず処方が必要です。処方とは、配合する薬物の種類やその分量を指示したもので、漢方医学では病気の症状や患者さんの体質に合わせてぼう大な処方が考え出されました。そして、この処方にしたがって生薬を細かくします。そのためには薬研・石臼などいろいろな道具が用いられました。細かくしたのも、何度かふるいを通し、同じ大きさの粉末になるようにしました。そして生薬の粉末は鉢と乳棒で混ぜられ、さらにこね鉢でこねられます。それを押し出し式製丸機や扇形製丸器などで丸く作り上げます。最後に金箔や朱などで湿気などから薬を守るための膜をつけてできあがり。丸薬計数さじで1日分や1回分の丸薬を袋に入れていきます。

一方煎じ薬は、煎じ器に入る程度の大きさに生薬を切り、水とともになべや煎じ器で煎じます。大体半日くらいかけて半分の量に煮詰めますが、生薬によっては、それだけ別に煎じて後で混ぜるものや、鉄製や合金製の道具を使ってはいけない生薬もありました。このような知識は口伝えや書物によって積み重ねられてきました。



▲薬種屋「人倫訓蒙図彙」より



▲「訓蒙図彙」に見る「くすりきざみ」の図



▲「訓蒙図彙」に見る「石臼」の図

丸薬のできるまで



煎じ薬のできるまで



もともと薬研や石臼は、食物を加工する道具として考案され、転用されてきました。また、ふるいの中でも箱ふるいは、原料が飛ばされないようにふたが、またふるった粉が散らないようにふるいの下に箱をつけるなどの工夫がこらされています。このように、用いられていくうちに様々な改良が加えられました。

特に丸薬を作る機器は、効率よく同じ重さの丸薬ができるように、大型の押し出し式製丸機から手にのる大きさの扇形製丸器、そして宇津救命丸を作る宇津式製丸器まで、いろいろ開発されてきました。

煎じ薬を作る道具は、基本的には鍋のようなものがあればよい訳ですが、直接火にかけられ注ぎ口のある薬罐 (やかん) が便利でした。しかし、お茶を飲む習慣が広まると湯茶をわかすのに使われるようになり、煎じ薬には使われなくなりました。

企画展示室以外に展示してある製薬道具

どれも本館1階ロビーに展示中です。大量生産用の機械です。



▲人車製薬機



▲生薬切断機



▲大型の臼

詳しくはこちらを
ご覧ください

今回の企画展で紹介した様々な製薬道具を薬づくりの工程にそって解説した「丸める・煎じる～むかしの製薬道具～」を発行いたしました。

資料の写真のほかに、使い方をイラストつきで簡単に紹介しています。

1冊500円です。博物館事務所でお求めください。

医療つれづれ抄9

今回『灸艾図』という中国で一番古い『医療行為図』の模写を入手しました。

昨年（96年）10月日本薬史学会主催の「医薬史蹟を尋ねる旅・中国」に参加して、北京の中医研究院医史博物館に行ったところ、中国で一番古いといわれる医療の絵が展示されていて、模写した複製品なら譲ってもよいと言う事で入手したのが、この『灸艾図』という絵です。この絵を斡旋していただいたのは、中国中医研究院中国医史文献研究所 鄭金生所長で、その先生の説明によると、絵の由来は次のような事です。

『1、この絵の原画は台湾の故宮博物館に所蔵されている。「故宮書画録」に掲載されている。元の画題は『灸艾図』と言う。その意味は民間の医者が灸灸を施して病を治療している所である。しかし絵の中に膏薬や外科手術器具が描かれ、今日では単なる灸灸ではないと考えられている。近々出版される「中国医学通史・図譜巻」では「民間医生行医図」と命名した図は民間医

が灸灸あるいは外科手術を施しているところである。』

2、この絵の原作者は、北宋末期の李唐、字は唏古。画家である。南宗初期に成忠郎、画院待詔（官名）の名を授かる。

北京中医学院博物館に収蔵する複製品は画家 呉宮平の模写、当博物館に譲りました絵は中国中医学院画家 馮増春の模

灸 艾 図



写。模写の時期は1995年8月。』

李唐（1049～1103）は「故宮名畫選萃」によれば河南河陽三城の人、字を唏古と言ひ、徽宗朝時代に画院に入り、建炎時代（南宗の高宗）に成忠郎に授けられ、画院の待詔になったということです。山水、人物、牛などを得意とし、好んで長い図巻

を描いたとされます。代表作に日本の国宝『山水図』京都、高桐院）があります。李唐が活躍した徽宗の時代は太平惠民和劑局方が編纂されて薬局がつくられ、中国では薬が供給され始めた時代です。この絵は治療しているところで、医師の後に薬か膏薬をもって控えています。『灸艾』という言葉によって医療行為が代表されていたのでしょうか？

日本の医療に関する昔の絵は、病草紙（やまいのそうし）が知られています。これは李唐の灸艾図より100年程新しく人間の病気の種々のありさまを描いた平安から鎌倉にかけての絵巻（十二世紀後半）です。各段分離されて関戸家その他に分蔵。鼻黒の一家、不眠症の女、風病の男など深刻な病状をユーモラスに描き、一部に治療している絵があります。『灸艾図』は中国における医療の幕開けを示す画です。

くすり物館館長 岩井鑛治郎

（灸灸とは一艾はヨモギのことで、よもぎから作ったもぐさで灸を据える事である。）

薬草園から

薬用植物園ではここ数年、240種の薬草と230種の薬木ほか、温室に熱帯・亜熱帯産の有用植物約80種を植栽展示しています。

毎年のことですが、電話での問い合わせや見学者から『薬草園はいつ頃見学するのが一番良いですか』とか『薬草園の見頃は何時ですか』という質問があります。「どのような薬草が見たいのですか」と、こちらが質問しても〇〇を見たいという返事が帰ってくることは稀なので、「5月中旬頃から7月頃が一番良いでしょう。」と返事をするにしています。5月中旬頃になれば、種まき・植え付け作業もほぼ終わり、また開花する薬草も増えてくるからです。

ただ5月中旬頃には花が終わっている植物も少なくないのも事実です。薬草の中ではオウレン、ウスバサイシンの開花は早く、3月上旬頃

からで、次いでアミガサユリが3月下旬から4月中旬に開花します。オメキグサという別名のある毒草のハシリドコロなども芽を出して葉が展開するとすぐに開花し、4月下旬頃には淡緑色の茎葉だけになってしまい、盛夏の頃には地上部は枯れてしまいます。イカリソウの仲間も4月中旬に花期が終わり、新しい葉が出そるきます。

しかし、5月頃から7月初旬まではいろいろな薬草の花が観賞できる時期であることは事実です。カキドオシ、クサノオウ、オキナグサ、シラン、ヒナゲシ、シャクヤク、ポタン、コブシ、アンズ、サンシュユ、レンギョウ、アケビ、テンダイウヤクなどのほか、人気のあるカミツレ（カモミール）やラベンダー、ルバーブも開花します。今でも心臓のくすりとして使われるジギタリス、口紅の

薬草園の花を見にきませんか？

原料にされるベニバナをはじめ、絶滅危急種になっているムラサキなども5月中旬頃からで、6月になるとトウキも開花し、花期は8月頃まで続きます。気候もよく、晴天が続くこの時期が、やはり見学の適期でしょう。

夏になると、高温を好むチョウセンアサガオ、ペラドンナ、ハブソウ、エビスグサ（ハブ茶）、センナ、クズ、コガネバナ、ゲンノショウコ、ウコン、ヘチマ、ツルレイシ、ウイキョウ、ヤマノイモなどが開花し続けます。

ハーブコーナーでは、香りのよいバジル、マジョラム、ローズマリー、オレガノ、ヒソップ、ハッカなどのかわいい花が初夏から秋にかけて順次観察できます。

薬用植物園 白井英夫

※絶滅危急種-絶滅が危ぶまれていると指定を受けた植物

TOPIX

～新収蔵資料をご紹介します～

◆人体国病薬合戦図／長谷川貞信書画

を新しく購入しました。薬将が病の賊を打ち倒し人休国を平治させたという『薬』と『病』が戦っている絵です。延寿丸は妙薬で、絵本ばい徴瘡軍団を買って読むと徴毒の治療に効果があると宣伝しています。大阪の宮地賢輔製薬所のものです。

100×30cm▶



◆応急手当法のポスター

高崎市の村田内科医院の村田謙二先生よりいただきました。ご紹介いたします。これは、昭和17年に陸軍医務局の監修で、発行されたものです。「突然の怪我や発病に対しては第一に落ち着く事で、第二に、処置は確実に速やかに行う事、第三に応急処置後は直ちに医師の治療を受けることである。」とあり、血の止め方、骨折、打撲の時などの応急処置法が具体的に書かれています。



▲52×37cm

◆こんな資料を貸し出しました。

◇ペニシリン

ペニシリンが市販され始めてから、50年がたちました。日本化学療法学会特別企画「ペニシリンの半世紀」学術講演会、展示（1997/12/7）が岐阜で行われました。ペニシリン14点、パネルなどを展示しました。

◇シーボルトの薬箱

江戸後期に来日したドイツ人医師シーボルトの生誕200年を記念し展示が行われました。「シーボルト父子のみた日本～生誕200年記念～」展

江戸東京博物館（4/20～6/30）

国立民族学博物館（8/1～11/19）で開催されました。「シーボルトの薬箱」を貸し出しました。

◇天然痘赤絵

特別展『大人形への祈り—息災と豊稷を願う—』

名古屋市博物館（1997/2/10～4/20）

「赤絵鐘馗、桃太郎、牛痘引札、疱瘡心得草」などを貸し出しました。

◇生薬・海人草

特別展「びっくり！海藻大発見」

海の博物館（1997/3/20～6/25）

「生薬海人草、薬品マクニン、ヨードフォーム、ちらし」などを貸し出しました。

◆1996年度の企画展終了

1996年度の企画展『百年前のくすり～いろいろな病にどんな薬で戦ったか～』は、おかげさまで11月24日をもって終了致しました。それぞれの薬を常設展に展示しました。

◆植物園の案内板が新しくなりました。

薬木、薬草の名称から、場所を探しやすいようカラーで作りました。

◆96年度博物館五大ニュース

- ①企画展『百年前のくすり』開催
- ②薬用植物友の会3年度成功に終わる
- ③白沢レプリカ作成
- ④実母散生薬切断機展示
- ⑤ゴードン・内藤合同カンファレンス開催

資料・図書のご寄託・ご寄贈者ご芳名

アスゲン製薬(株) 浅田信雄 浅井さえ子
ウサイエン製薬(株) 衛藤仁一 片桐平智
加藤栄治 佐藤清夫 末次孟 田辺功 高橋美智子
千葉胤孝 千葉清子 丹羽源之助 能瀬彰
室清明 マックスファクター(株) 村田謙二 (敬称略)

ありがとうございました。

～お詫び～

「くすり博物館だより」36号「新収蔵資料をご紹介します」の欄にて間違いがございました。深くお詫び申し上げます。下記のように訂正させていただきます。

(誤) 昭和5～11年→ (正) 昭和12～21年

館長 岩井鎮治郎 副館長 三宅康夫 学芸員 稲垣裕美、朝倉加代 学芸員・司書 野尻佳与子、伊藤恭子(編集担当) 庶務 森田麻起子
説明員 小島敦子 薬用植物園 白井英夫、栗本省三、松尾三雄 顧問 青木允夫 アドバイザー 逸見誠三郎
内藤記念くすり博物館 開館/9:00～16:00 休館/月曜日・年末年始 [12/28～1/8]